

想うがままに

追悼 赤松徳治さん

本誌編集委員 小寺山康雄

畏友赤松徳治さんが、八月十三日未明急性心筋梗塞で逝った。享年七十六才であった。お連れあいの一周年忌法要を予定していた日だったので、お経を

あげに来た坊さんが冷たくなった赤松さんを発見したという。唯物論者を自認するぼくだが、何か因縁めいたものを感じてしまった。

神戸外国語大学ロシア語学科卒の赤松さんは、ロシア文学者であるとともに、神戸ではよく知られた詩人でもあった。二〇〇四年には神戸市文化活動功労賞を受賞されている。赤松さんはぼくのような無粋な門外漢にも、訳

書や詩集を刊行されるたびに贈って下さった。ぼくは礼状もろくに書かない不義理な輩であったことを、あらためて思い知らされた死であった。

亡くなられる一カ月前に、赤松さんはこれまでの詩集をまとめた本を上梓されたので、積年の不義理のお詫びもかねて、芦屋で友人数人と赤松さんを囲む飲み会を催すことにした。その日程の打ち合わせを電話でしたが、なくなる二日前であった。あるいは赤松さんの声を聞いた最後の一人かもしれない。これもまた因縁めいたものを身近感じるが、ぼくが死というものを身近

に感じる年齢（七十一才）になつたらであらう。

革命家だった赤松さん

ところでぼくの知っている赤松さんは、文学者とか詩人としてでなく、政治的人間としての赤松さんである。

六〇年安保闘争の熱気も覚めやらぬ一九六〇年秋、赤松さんは神戸大学教養部御影分校の自治会室にぼくを訪ねてきた。赤松さん二十五才、ぼくは二十才のときである。当時、赤松さんは日本共産党神戸地区委員会の専従で、ぼくは共産党神戸大学細胞教養部

御影分校班のキャップであった。

共産党の専従がペいペいのぼくをわざわざ訪ねてくるのは解せない。ひよつとすると、その頃すでに共産党主流に反旗を翻していたぼくらに対する一本釣の逆オルグにきたのだろうかと言った。翌年七月、ぼくらは春日庄次郎、山田六左衛門らとともに、共産党八回大会を機に離党し、除名されるのだが、赤松さんも灘居住細胞の一員として離党・除名されるとは、そのときは知る由もなかった。

赤松さんは言い難いことなのか、なかなか喋らない。散々じらされたあげく赤松さんの口から出た言葉に、ぼくは驚くとともに、心底同情してしまっただ。「なあ、小寺山くん。ぼくも君らと同じように宮頭（宮本頭治当時共産党書記長）体制に反対している。そのことをまず知っておいてほしい。そのうえでこんなことを頼むのは恥ずかしいが、ぼくは経済的に困窮している。専従費は月三千円だが（当時、大卒の初

任給は一万数千円なので、その数分の一）、それも数ヶ月支払いが遅滞している。地区委員会は専従費ほしかったら、まず神大細胞の紙代を徴収してこいというのだ。君らの立場は綱領反対派の同志としてよくわかるが、何とかしてくれないか」と、赤松さんは汗をかきながら、ようやく言いきった。

当時、神大細胞は百名を超える黨員がいて、東神戸地区では最大の細胞だったから、『赤旗』の読者は数百人いただろう。なかでも教養部は多かった。ところが細胞指導部は「紙代は直接払うな。指令が出るまで貯めておけ」と指令していた。地区委員会との闘いの武器にしていたのだろうが、ぼくはせいこい指令だと思っていた。ぼくは「わかりました。紙代が赤松さんの専従費とは知りませんでした。これまでの紙代を一括お支払いします。それにしても地区委員会は卑劣ですね」と、悲憤慷慨した。このことでぼくは指導部に指令違反ということで、査問

されるが、革命家志望のぼくは同じ革命家に対する連帯だと嘯いた。

「髪結いの亭主」としても同志

赤松さんは共産党離党後、社革（社会主義革新運動）を経て統社同（統一社会主義同盟・学生組織フロント）まで、ずっと僕らの同志だった。ぼくが六十九年に統社同と訣別してからは、社会党、のちに新社会党と一緒に、神戸で護憲など市民運動をしてきた。その間、生活を支えてきたのは美容師だったおつれあいである。

文字通り「髪結いの亭主」だった赤松さんである。美容師ではないが相方のおかげで食ってきたぼくは、その意味でも赤松さんとは「同志」だった。おつれあいは二〇〇一年に脑梗塞で倒れ、十年も伏せられたまま、二〇一〇年に亡くなられる。苦勞をかけどおしのまま先立った妻に対して慙愧の念にたえがたかったであろう赤松さんの心中は察するに余りある。

しかし、一人息子の竜くんが神戸でNPOを立ち上げ、障害者の就労など地域支援活動をしていることは、赤松さんにとって、せめてもの慰めであつたにちがいない。

八月二十七日におこなわれた追悼会は、赤松さんの多彩な活動を反映して、盛大にして多様な人びとが集まつた。そこで斉唱した鎮魂歌は、ロシア民謡「ともしび」「トロイカ」であつた。久しぶりに唱う歌に、ぼくは赤松さんとの五十年前の最初の出会いを想い出して泣いてしまった。

最後に、赤松さんの詩集から山田六左衛門さんを想う詩を紹介し、お二人を追悼する。

六さんのこと

ポプラ並木が芽をふいている

春先の御堂筋

鳥打ち帽に古ぼけたオーバーを着て

斜めに巨躯をゆすぶりながら
ゆつくりと六さんがいく

足早に通り過ぎていく娘たち

明るい声が陽光のように弾んでいて
季節を引っぱっているようだ

いいなあ 娘さんたちは

みんなふつくらとしていて……

大声の六さんが 声量を落としてつぶやく

天皇制は 惨いよ

俺たちには 青春がなかったからなあ

そう言つて ははは と小さく笑つた

昭和三年 岸和田紡績争議を指導

三・一五で検挙されて入獄

以来 出たり入つたり

日本のいちばん暗い時代を

いちばん暗い場所で過ごしたのに

底抜けに明るい男

二人だけになると

むずかしい顔をして 小声で話す

きみは何になるのかね

尋ねられて わたしは返事ができなかった
いまだに返事ができないでいる

釣りだけが趣味で

宇治川の鮎だぞー そう言つて

日頃の素寒貧の償いに

飴煮の折詰を

上機嫌で配つていた

三月の寒い日 釣りが原因で亡くなつた

水面の浮子から

半回転して止まつた春先の鈍空を

昭和は一気に駆け抜けたのだろうか

一八歳の時

松井須磨子のカチューシャを観て

運動に入った とか

わたしに投げかけられた問いは

もしかして この老青年の胸の中で

垂直に垂れる釣り糸のように

投げ続けられた一筋ではなかつたらうか